



何にでも役立つ品質工学 (13)

— 補 遺 —

Robust Quality Engineering Is Useful for All Problems (13)

— Appendix —

矢野 宏*

Hiroshi Yano

1. 討論の重要性

品質工学は自分がバカであることを早く分からせる学問である。自分に問題があることを分からないのが、一番始末が悪い。しかし、これは討論してみなければ分からない。討論することは重要であるが、討論を理解出来ない者もいる。

筆者は毎月第一土曜日に、技術を具体的に討論するためのNMS研究会を開催している(2017年9月現在)。NMS研究会は、技術者の討論の場を設けて、技術者が自らを向上させることを目標としているが、これも自主的で、すべて参加者の自主判断である。規制はない。

しばしば「教えを乞う」というが、この研究会で教えているつもりはない。誰もが自分の判断で情報を吸収しているだけである。したがって、結果の責任は本人にあることになる。しかし、毎月第一土曜日に遠くから時間をかけて来るのは、貴重なことであると思っている。感謝以外にない。地域も名古屋、宮城、長野、富山、宇都宮など、さまざまな所からである。そこでこの連載の最後に、多くの機会をとらえてQをもらい、Aとして回答することにした。

2. Q & A

Q1 品質工学に限らず、研究テーマの目的を可能な限り明確にして取り組むべきことはいうまでもないことだが、さまざまな社会的な問題を取り扱っていく上で、テーマの真の目的を明らかにすること自

体が大きな課題となることが考えられる。そのようなときに筆者が特に重点をおいていることは何か？

A1 特にビッグデータなどの場合に、MTシステムの知識があると、手法的に解析してみたい人が多い。あくまで「自ら取り組む課題は何か」を考えたいので、行動を起こすべきであると思っている。田口玄一は「あなたの真の目的は何か」を問い、その上で「あなたの技術課題は何か」を問うた。技術を離れて社会的な問題の場合でも同じであろう。社会的な問題は範囲が広いので、目的が拡散的になるので、さらなる注意が必要である。

品質工学の研究事例は主として技術開発が中心であった。しかし、田口玄一の主張をみると、社会的自由の総和の拡大という、かなり抽象的な課題を目指している。もっともこのことを強く主張したのは、2000年代になってからのことであるから、初期の段階では、技術指向が強かったと見てよいであろう。しかし、現在の品質工学では、社会的な広がりのある問題が次々と扱われている。

ある課題の論理の展開が可能であるからといって、この考え方を具体化して行き渡らせるためには、長い時間が必要である。「社会」というテーマはそもそも広いが、概念的に考えたものではなく、個別問題として解決しようとしたテーマがいくつか出てきたときに、結果的に「社会」に収斂したことになる。このことは品質工学を活用するにあたって、重要な注意点である。すなわち、思想的にテーマを考えるのではなく、具体的に解決しなければならない問題が発生したときに、具体例に即して考えることから始めるということである。

* 応用計測研究所(株)